

縮む勇気をもって未来予想図を描く



石 濱 泰

4月より会員・広報担当副会長を仰せつかっている。今までは特に気にしていなかった本会の未来予想図についてエビデンスに基づいて議論する機会も増えた。10～15年後に本会の中心となる40代以下の会員と特に現状を共有したい。

日本は2010年代についに人口減少社会となったが、本会ではずいぶん前からすでに会員減少が続いている。様々な施策が打たれてきたが、会員が9000人いた「よき時代」には戻れるはずもなく、現在の会員年齢分布から予想すると10年後には約3000人の学会になる。この急速な変化に対応できず、2018年度、本会はずいに赤字を計上した。このまま何もしなければ資産を食いつぶし、数年後には確実に借金団体となる。学術分野としての分析化学の重要性とは無関係に、学術団体としての本会の存在自体が危機に瀕しているのである。次の10年で聖域なき改革を断行し、「縮む勇気」をもって「小さな学会」に生まれ変わらなければ本会の未来はない。わが国では産業界だけでなく、大学でも現在統廃合や再編が進んでいる。学会についても、人口減に基づく会員数減少は共通の課題であり、最近では共同で学術大会を開催するケースが増えてきた。学会を構成する人口が今後も右肩下がり減少する以上、いずれは学会自身の統廃合や再編は避けられない。そのなかで、3000人の小さな学会が魅力的に輝くための要素は何か。フラットで民主的な組織運営と、多様性を許容する文化ではないかと思う。現在の本会の現状をみると、標準物質の販売を行い、講習会・技能試験・分析士認証を担い、年2回の学術集会、2種の査読付き学術雑誌と学会誌の発行を行い、学術本の出版も行っている。さらに7つの支部、21の研究懇談会があり、それぞれ独自の活動を行っている。それを支える本部事務局には10名以上の職員がおり、外部に事務委託も行っている。それぞれの事業に不必要なものなど一つもないが、我々が縮むためには覚悟を決めて断捨離するしかない。個人的には、年1回の学術集会に学会リソースを集中し、そこで民主的で透明な運営と多様で進取の気性に富んだ発表と議論を充実させるべきであると考えている。

すでに改革に待たなしの時期に来ており、内山会長を中心にして今後次々と様々な改革が実行されていくことになる。学会執行部は2年単位で代わってしまうので、継続的な変革を行うには、あるべき未来予想図を会員全体で共有し、決して後戻りしない覚悟が必要である。特に、10～15年後、この学会の中心となるべき40代以下の会員の参加なしには今後の改革は成立しない。様々な機会を通じてぜひ積極的に未来予想図の提案と実現に関与していただきたい。

今、我々はシグモイド型2状態遷移の減少曲線の変曲点にいる。このまま右肩下りの直線になってしまうのか、それとも再び安定で健全な学術団体になれるのか、我々の縮む勇気が試されている。

〔Yasushi ISHIHAMA, 京都大学大学院薬学研究科, 日本分析化学会副会長〕